

ハイデガーと生成AI

マルチン・ハイデガーの哲学をなぜ生成AIというテーマとぶつけてみたのか。それは、ハイデガーの思考を自分の言葉に翻訳してみたい、という動機からです。ハイデガーの哲学は、戦後の日本における大学の哲学科では、関心の高い研究課題の一つでした。本国のドイツでは、ナチズムとの関係のためタブーだったハイデガー研究が、日本では普通に可能でした。マルクス主義がしっくりこない、保守的な志向を持つ学生にとって、ハイデガー哲学は魅力的なテーマだったと思います。1970年代末に私が学んだ京都大学でも、ハイデガー研究は盛んに行われていました。しかし当時の僕は、正直言ってほとんど興味がありませんでした。ドイツ哲学を勉強していたので、ハイデガーの著作も読むには読んでいたのですが、この哲学者の用いる特殊な用語法に馴染むことができませんでした。またその時代には、ある意味でハイデガー哲学との対決から出発したと言える、いわゆるフランス現代思想、例えばジャック・デリダの著作なども、一部の学生たちの間では話題になりはじめており、室井尚さんなどは非常に敏感に反応していました。僕はそれに影響は受けましたが、当時は本気で関心を持ってませんでした。

ハイデガー哲学に対するこうした無関心は、今から考えてみると、この哲学者の言葉遣いの異様さとは別に、何というか、それを研究していた日本人学者たちの醸し出す雰囲気にも共感できなかった、ということもあります。彼らはハイデガーの独特な言い回しを日本語に移す時、それを必要以上に神秘化して解釈しているように僕には思われました。この傾向は、今でも感じる時があります。ハイデガーは、ドイツ語という言語の特性を利用して思考するというスタイルの思想家です。カントとはまったく違います。日本の研究者たちの多くは、言語の中に思考の根源的次元を求めるハイデガーのやり方に魅了されてしまい、同じことを日本語でも試みようとし、例えばハイデガーの用語法、悪く言えば「ジャーゴン（隠語）」を、いかにして日本語に変換するかという、僕にとってはあまり意味があるとは思えない仕事に、多大な労力が費やされてきたように思えます。その結果、日本語としては到底理解できない、奇怪な翻訳書が出来上がります。これは哲学の翻訳において、ある程度仕方のないことではあるのですが、哲学において翻訳とは目的ではなく、それを元に自分の言葉で思考を開始するための出発点に過ぎません。工夫を凝らした訳語へのこだわりで勝負するようなことはありません。重要なのはハイデガーの思考を自分で引き受け、それを自分の言葉によって展開することです。ジャック・デリダはそれをやったから重要なのだと思います。

いくつか実例をもとにして展開してみましょう。まずハイデガー哲学の根本概念である「Sein（ザイン）」、「存在」です。「有」と訳した人もいます。何かが〈ある〉ということですね。日本語で思考していると、まずこんなことを問題にすること自体が、非常に抽象的で掴みどころがないと感じるかもしれません。けれども、日本でも仏教思想においては「存在」は主要なテーマの一つでした。けれどもそれはふつう漢語を媒介にして行われます。ヨーロッパ系言語では「ある」という動詞の不定形を名詞（Sein, être, being, etc.）として扱うことができるので、アリストテレスから中世キリスト教神学を通して、

17世紀、18世紀まで、「存在」は哲学的思考の主要なテーマでした。「存在」について考えることは、存在論、形而上学と呼ばれたりします。しかし19世紀以降の近代的・合理的態度の拡大とともに、こうした思考の領域は見えにくくなってゆきます。近代的・合理的思考からすると形而上学は敵であり、廃絶されるべき過去の遺物です。こうした「存在」の忘却はハイデガーによると、すでにプラトン（つまりソクラテス）から始まっています。より最近の出来事としては、政治と産業における「革命」以降、国民国家の成立、科学技術の発展、世俗的な世界観の広がりとは並行しています。

さて、後期のハイデガーは科学技術（テクノロジー）についても哲学的に思考しました。テクノロジーという概念は、テクネー（技術）とロゴス（言語／論理）とが結びついた概念です。それは近代的な技術の姿ですが、ハイデガーはまず「技術」とは何かと問います。技術（テクニク）とはそもそも何なのか？ 近代人の多くは、技術とは自分の目指す何らかの目的——幸福、繁栄、進歩、等々——を実現するための手段だと理解しています。ハイデガーも技術を手段と考えますが、それは特定の目的の実現ではなく、真理の実現、事物の覆いを取り去ってあからさまにする手段です。ここで、ハイデガーの考える「真理」について、補足する必要があります。近代人は「真理」を自然科学のモデルで考えており、それは実在と認識の一致です。記号論理学では実在と認識の一致／不一致を「真／偽」の二値として形式的に表現します。それがデジタル情報における「0／1」です。コンピュータは、こうした形式化が可能であるという哲学的前提に基づいています。しかしハイデガーは、それとは別な真理概念を主張します。それによると真理とは、事物の覆いを取り去られ、あからさまに現れているという状態のことです。これをギリシア語で「アレーティア」と言います。

事物の覆いを取り去り、真理をあからさまに、目の前に突きつけるものとしての「技術」には、簡単に言うと二段階あります。ひとつは「目の前に運んでくる

(Hervorbringen)」というようなあり方で、これが職人的な技術であったり、芸術であったりします。文明の始めから存在する技術です。もう一つは、自然の中から何かを強制的に引っ張り出して、人間の役に立てるようなあり方 (Herausfordern) であり、これが近代的な技術、すなわちテクノロジーです。ハイデガーはもちろん生成AIを知りませんが、コンピュータを可能にした20世紀前半の科学的革新、サイバネティクスの考え方に強い関心を抱いていました。もし彼が今生きていて生成AIを目にしたら、それがサイバネティクスの行き着いた先、つまり近代的技術のとり究極的な形だと考えたことでしょう。あらゆるものを「何が何の役に立つか」という手段-目的の構造の中に配置し、万物を引き立て、駆り立てる体制のことを、ハイデガーは「ゲ-シュテル (Ge-stell)」という言葉で表現しました。生成AIとは「ゲ-シュテル」の最終的な形態であると言えます。この異なる言葉も単に訳すのではなく、ドイツ語に馴染みのない人にもできるだけ分かりやすく説明してみたいと思います。